令和７年度

江南市小学生
平和教育研修派遣報告書

令和７年８月５日～６日　広島

江南市教育委員会

もくじ

1　はじめに　団長　髙橋　伸　1

2　平和教育研修派遣団員名簿　1

3　日程表　2

4　感想レポート

「1945 年８月６日午前８時 15 分以降の広島」　尾関　圓佳　3
「同じ青空に立った僕」　井戸田　旭生　3
「原爆の恐ろしさを未来へつなぐ」　長谷川　湊都　4
「想いを世界へ、そして未来へ」　山下　隼輝　4
「原爆ドームから学んだ平和の大切さ」　木谷　優希　5
「原爆ドーム　８月６日」　細川　莉央　5
「８０年の時を経て被爆者の方が思うこと」　加藤　沙代子　6
「原子爆弾の恐ろしさ」　加藤　千沙　6
「繋ぐ　平和への思い」　寺澤　みつ葉　7
「被爆体験講話　戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさ」　渡邉　拓実　7
「平和への第一歩」　岩谷　咲依　8
「平和への思い」　橋本　遥　8
「戦争がない世界を創り上げていくために」　安村　菜々子　9

5　おわりに　副団長　伊藤　靖子　9

は　じ　め　に

８月５日、私たちが訪問した広島は８０年前を思わせる暑さでした。平和記念公園を巡り伺った話、被爆体験をされた方から伺った話。「原爆ドーム」をはじめとする被爆遺構の数々や慰霊の石碑を間近で見た事、平和記念資料館の展示物。それらのすべてが私たちの心に直接響き、心を大きく揺さぶられるものでした。

８月６日に参列した平和祈念式典では団員と同じ小学６年生が平和への誓いを述べました。「One voice. たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば変化をもたらすことができるはずです。大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。」と語りかけました。

研修に参加した団員の皆さんには、ぜひ自分の言葉で、研修での学びを伝え、世界を変える平和への一歩を踏み出してほしいと思います。また、これからの人生のどこかで平和に関わる活動に向け行動を起こすことが広島で平和のバトンを受け継いだ皆さんの重要な役割だと私は思います。

今回の派遣に際し、１３名の団員はもちろん、引率者の３名も貴重な体験をさせていただくことができました。ご尽力いただいた江南市・江南市教育委員会をはじめとする関係機関の皆様、団員を支えてくださった保護者の皆様や学校関係者の皆様、ありがとうございました。

令和７年８月　　　団　長　　　髙　橋　　伸

・・

平和教育研修派遣団員名簿

団　長	藤里小学校	校　長	髙　橋　　伸		
副団長	古知野西小学校	教　諭	伊　藤　靖　子		
養護教諭	古知野北小学校	養護教諭	安　部　　愛		
団　員	古知野東小学校	木　谷　優　希		古知野東小学校	長谷川　湊　都
	古知野西小学校	安　村　菜々子		古知野南小学校	橋　本　　遥
	古知野南小学校	渡　邉　拓　実		古知野北小学校	山　下　隼　輝
	布袋小学校	井戸田　旭　生		布袋小学校	寺　澤　みつ葉
	布袋北小学校	細　川　莉　央		宮田小学校	加　藤　千　沙
	草井小学校	尾　関　圓　佳		藤里小学校	加　藤　沙代子
	門弟山小学校	岩　谷　咲　依			

日　程　表

８月５日(火)　研修１日目

時　　刻	交通機関	行　　程
７：１５		市役所正面玄関集合
７：２０		出発式
７：５０	名古屋鉄道	名鉄名古屋駅へ
８：４７	新 幹 線	のぞみ２９５号　：　新大阪駅へ
９：５４	新 幹 線	みずほ６０７号　：　広島駅へ　昼食　車内弁当
１２：１５	広島電鉄	原爆ドーム前駅へ
１２：３５	徒　　歩	平和記念公園内見学　ガイド：半田　修三さん 原爆の子の像にて折り鶴奉納 原爆ドーム、原爆供養塔、平和の鐘などを見学 平和記念資料館見学
１５：５１	バ　　ス	広島駅へ
１６：２０	徒　　歩	被爆者体験講話 講　師：岡本　忠さん
１７：３０	徒　　歩	夕食　ひろしまお好み物語
１９：２０	バ　　ス	グランドプリンスホテルへ
１９：５０		ホテル着、打合せ会
２１：３０		消灯

８月６日(水)　研修２日目

時　　刻	交通機関	行　　程
５：３０		起床
６：００		朝食
６：５０	タクシー	平和記念公園へ
８：００		広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式典に参列
９：１５	徒　　歩	土橋駅へ
９：４５	広島電鉄	宮島口駅へ
１０：４０	ＪＲ西日本フェリー	宮島港へ
１０：５０	徒　　歩	宮島・厳島神社にて見学
１２：００		昼食　鳥居屋
１３：５５	ＪＲ西日本フェリー	グランドプリンスホテルへ
１５：０２	バ　　ス	広島駅へ
１６：１２	新 幹 線	のぞみ１０２号　：　名古屋駅へ
１８：５２	名古屋鉄道	江南駅へ
１９：１５	徒　　歩	駅前用地にて帰着式
１９：２５		解散

「1945 年８月６日午前８時 15 分以降の広島」

草井小学校　尾関 圓佳

私は、平和教育研修派遣で広島を訪れました。その時訪れた広島平和記念資料館では 1945 年（昭和 20 年）８月６日の広島の様子がとても伝わってきました。

その中でも一番心に残ったことは、原爆が爆発したあとに撮ったであろう写真です。その写真には、身を寄せ合う人々や血だらけの地面が写っていました。広島が当時このような悲惨なことになったことは知っていましたが、この写真を見てより悲惨だったことが分かりました。1945 年８月６日午前８時 15 分以降、広島のどこへ行っても似たような状態だったということを考えるととても辛いです。

私は広島平和記念資料館を訪れて感じたこと、悲しみだけでなく、悲惨さや辛さも後世に伝えていきたいです。

「同じ青空に立った僕」

布袋小学校　井戸田　旭生

あの日、あの時間、広島の日常は奪われました。僕はその日と同じ青空の下、あの日と同じ時間に原爆が落とされた場所に立ち、「ここが一瞬で真っ暗になったのか」と思うと、胸が苦しくなりました。80 年前、人類初の原子爆弾が落とされ、広島は焼き尽くされ、人々は苦しみました。

平和記念資料館で一番心に残ったのは、熱線で形が変わった岩です。岩でさえ形が変わるほどの熱を浴び、被爆した人たちはどんなに怖く、つらかったのかが伝わってきました。展示品を見てその苦しみを想像し、平和への大切さを強く感じました。

僕は今回の派遣で広島に行き、原爆が落とされた場所でいろいろなことを学びました。この経験を無駄にせず、核兵器の恐ろしさや資料館で見て感じたこと、そして被爆者の方から直接聞いた話を沢山の人に伝えていきたいです。

「原爆の恐ろしさを未来へつなぐ」

古知野東小学校　長谷川　湊都

1945 年８月６日、広島に原爆が投下されました。広島の街は一瞬にして壊され沢山の人が亡くなりました。その時、生き残った人も死ぬまで原爆症といった後遺症や不安が消えず、ずっと苦しんでいます。

原爆の子の像のモデルである佐々木禎子さんも 2 歳のときに被爆し、10 年後、白血病で亡くなりました。その３年後に原爆の子の像が建てられました。原爆の子の像には数え切れないほどたくさんの折り鶴が奉納されていて、それだけ多くの人が核兵器廃絶を願っているんだなと思いました。

しかし、被爆者がどんどん亡くなっていって、被爆者の話を聞く機会が少なくなり、原爆の恐ろしさをあまり知らない人も増えています。だからこそ、被爆者の話を聞いた僕達が未来の人たちに原爆の恐ろしさを伝えていかなければいけないと思いました。

「想いを世界へ、そして未来へ」

古知野北小学校　山下　隼輝

原爆の子の像には、僕の想像をはるかにこえる数の色とりどりの折り鶴が世界中から届いていて、こんなにも多くの人が平和を祈っているという事に心が温かくなりました。その一方で、世界ではいまだに戦争が続いていて、核兵器の使用をほのめかしている国もあるという現実に胸が締め付けられ、ここにある想いが全人類に届くようにと願ってやみません。

「放射線を浴びたことにより少しずつ症状が出てしまい、苦しみながら亡くなっていった」

ガイドさんのお話のなかで最も印象に残った言葉です。原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子さんも同様で、被爆から１０年後に白血病でなくなりました。

僕は今回の研修で実際に見て、聞いて、感じたことを、責任を持って多くの人に伝えなければなりません。また、当たり前の日常に感謝をしながら、日々をしっかり生きていこうと思います。

「原爆ドームから学んだ平和の大切さ」

古知野東小学校　木谷　優希

原爆ドームを訪れ、実際に目の前に立つと、崩れ落ちてしまっているレンガの壁や、鉄骨が残っており、写真で見るよりも痛々しさが伝わってきました。

原爆ドームの旧名、「広島県産業奨励館」は、1945 年の８月６日に投下された原子爆弾の爆心地近くにあり、周りの建物が倒壊する中、奇跡的に残り、今でも当時のままに残っています。原爆ドームの保存に反対する人もいましたが、補修工事を何回も繰り返し、崩れないように保っています。原爆ドームを保存することは、核兵器の恐ろしさを後世に伝え、世界平和を願うことです。

被爆体験者の岡本さんは、「私たちのような体験を二度としないよう、戦争や核兵器をなくすことを願っている」とおっしゃっていました。私は、今回の経験を経て、戦争や核兵器の恐ろしさと平和の尊さをたくさんの人に伝えていく必要があると思いました。

「原爆ドーム　８月６日」

布袋北小学校　細川　莉央

1945 年の８月６日８時 15 分、狙いより 300m 離れた場所に原子爆弾が投下されました。爆心地から 160m 離れた場所にあったのが広島県産業奨励館、今の原爆ドームです。その中は熱に耐えやすいレンガもバラバラになり地面に落ちていました。鉄は骨組みだけになっていて、ガラスはない状態でした。

いつものように仕事に通っていた人達も、一つの原爆により多くの命がなくなってしまいました。調べた中でも、私が一番印象に残ったのは、「毎日運行していた電車も車も、中にいた人は一瞬にして黒焦げになり、亡くなってしまった」という所です。私は、たった一つの原爆により、多くの人たちが亡くなってしまったという事が、衝撃的でした。その原爆ドームが今も当時の苦しみを伝えてくれているから、私は今のような考えを持つことができました。今できることは、私たちのような戦争を知らない世代に、原爆の恐ろしさを伝えていくことだと考えています。

「80 年の時を経て被爆者の方が思うこと」

藤里小学校　加藤　沙代子

80 年前の昭和 20（1945）年８月６日８時 15 分に人類初となる原子爆弾（原爆）が広島の広島中区の島病院上空 600m で爆発しました。

10 万人、この数は今「被爆者」と呼ばれる人の数です。被爆体験講話で私たちに話してくれた岡本忠さんも被爆者の１人です。原爆でできた傷跡もずっと隠しながら生きてこられました。被爆した放射線の影響で去年の 11 月にはがんにもなってしまいました。このようにいつがんや病気になるかが分からないため、今でも不安に思っているそうです。忠さんの願いは、核兵器を持つ国がなくなってほしい、そして、この思いを次につなぎ、バトンパスしてほしいというものです。これを聞き、忠さんの世代がずっと伝えてくださっていたことを今度は、私たちが次の人や次の世代に伝えていこうと思いました。

今回の平和教育派遣事業で一番に思ったことは、核兵器は絶対に持ってはいけない、戦争、原爆というあやまちを二度と繰り返してはいけないということです。

「原子爆弾の恐ろしさ」

宮田小学校　加藤　千沙

被団協（日本原水爆被害者団体協議会）はノーベル平和賞を 2024 年に受賞しました。その団体の被爆体験者である岡本忠さんのお話で私が一番印象に残っていることは、原爆の威力や被害についてです。

被爆したとき忠さんは１歳５ヶ月だったので母親から聞いたという話を教えてくださいました。原爆投下後、いつも見ていた景色とはちがっていて電柱が倒れていたり家が潰れていたりして町がぐちゃぐちゃでどこがどこだか分からなくなっていたと聞いて、写真では見ていたけど、さらに恐ろしく感じました。

また爆心地の島病院や原爆ドームの近くのコンクリートの地面は 3000℃にもなっていて、３km 離れたところでも熱かったと聞きました。鉄もコンクリートも骨も溶けてしまう 3000℃とは、どんな熱さだったんだろうか、想像もつきません。

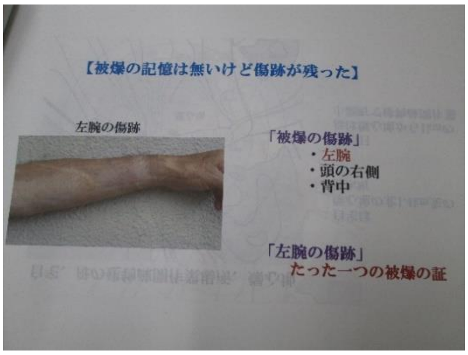
お話を聞いて私は、核兵器をなくしたほうがいいと思いました。そして広島から帰ってきてから学んだことを振り返り、やはり核兵器を世界からなくすべきだと感じています。

「繋ぐ　平和への思い」

布袋小学校　寺澤　みつ葉

広島で岡本忠さんより被爆体験講話をしていただきました。岡本さんは１歳のころに被爆をし、80 年たった今でも腕に傷が残っていました。そして被爆後の生活では、十分なご飯が食べられなかったり、腕の傷を恥ずかしいと思い、隠しながら生きてきたりしたそうです。

私が岡本さんのお話を聞いた中で印象に残ったことは、被爆後の生活で、すごく遠い親戚まで頼ったが、受け入れてもらえず苦しい生活を送っていたことです。岡本さんは自分たちで家を作ったそうです。おいしくない麦めしばかり食べ、私より幼かった岡本さんはたくさんがまんしていたことが分かりました。毎日住むところもあり、お腹いっぱい食べられる日々があらためて大切だな、ありがたいなと思いました。たくさん苦労され、そこから少しずつもう戻らないと言われていた広島の日常を取り戻していったのがすごいなと思いました。



こんなに大変な生活をした時代があったことを伝えていってほしいと言った岡本さんの思いを忘れず、いろいろな人に伝えていきたいです。

「被爆体験講話　戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさ」

古知野南小学校　渡邉　拓実

平和教育研修派遣に参加して戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさをとても強く感じました。

研修では実際に見たり聞いたりしてしっかり学ぶことができました。特に被爆体験講話が印象に残っています。岡本さんは１歳５か月で被爆し、自宅は爆心地から 1.5km にありました。爆心地から 200m 以内の建物は一瞬ですべて倒壊したそうです。２km 離れた場所でも爆風がすごかったとお聞きしました。岡本さんは左腕と頭、背中に傷を負いました。それをずっと隠して生きてきましたが、傷の写真を撮って子どもたちに戦争の恐ろしさを伝えたいと考え、隠すのをやめました。その傷がたった一つ被爆の証だからです。その傷を僕たちにも見せてくれました。傷跡が今でも残り、生きている限り消えない原爆症に対する悩みがあるともお聞きしました。

岡本さんの話を聞き、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを感じることができました。とても悲しい思いをした人々がたくさんいたことを忘れずに、戦争の悲惨さを少しでも多く身近の友達などに伝えて、あの悲劇を繰り返さないために今自分にできることを考えていきたいです。

「平和への第一歩」

門弟山小学校　岩谷　咲依

私は、平和記念式典に参列して感じたことがあります。それは、自分にも平和のためにできることが必ずあるということです。

こども代表の「たとえ一つの声でも、学んだことに思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。」という言葉を聞いて、ただ学ぶだけでは意味がなく、学んだことに思いを込めて伝えなければならないのだ、ということに気がついたからです。その場にいて感じた、戦争の悲惨さ、平和や命の尊さなどをたくさんの人に伝えていこうと思います。

広島に原爆が投下されてから 80 年が経ちます。80 年前と聞くと遠い昔に感じ、他人事のようにとらえがちです。しかし、戦争を「他人事」のようにとらえていても、平和な世界は訪れません。「自分事」として平和のために何ができるかを一人一人が考え、実行していくことが、平和への小さいけれど、大切な第一歩になると思います。

「平和への思い」

古知野南小学校　橋本　遥

平和教育派遣では平和記念式典にも参列しました。約 50 分の平和記念式典では、原爆死没者名簿奉納、式辞、献花、黙とう・平和の鐘、放鳩、平和への誓い、あいさつ、ひろしま平和の歌の合唱を行います。私たちは黙とうから参加しました。

広島市長、松井一實さんの平和宣言では、「平和を願うヒロシマの心を理解する」・「平和文化を世界中に根付かせる」・「人類の悲願である核兵器廃絶」というような言葉が私の中で強く心に響きました。こども代表の平和への誓いでは、「平和について関心をもつこと」・「平和を創り上げていきます」といった平和に関する言葉が数多く出てきました。これは、たった一発の原子爆弾がこれまで平和だった広島を壊したということにつながっていると思います。

この 80 年間、平和を望んで生活をしてきた人たちがいます。そんな中、私たちは「平和」がどれだけ大切な時間かを考え、行動に移すべきだと思います。

「戦争がない世界を創り上げていくために」

古知野西小学校　安村　菜々子

平和教育派遣に参加して、戦争について初めて見たり、聞いたりすることがたくさんありました。時には、耳をふさぎたくなるような悲惨なお話もありましたが、この貴重な経験ができたことに感謝しています。

今回の体験では、特に平和記念式典に参列したことが印象に残っています。そこで、私と同じ６年生の平和への誓いを聞きました。特に印象に残ったのが、「One voice.」「大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができる」と宣言していたことです。これを聞き、自分にもできることがある、と強く心を打たれました。

今回、広島で被爆された方と出会って、自分だけでなく、孫、ひ孫への病気の影響を心配していることを聞いたり、資料館で見た真っ黒なお弁当に衝撃を受けたりする中で、原爆が与えた恐ろしさを知りました。この感じたことをたくさんの人に語り継いでいき、その悲惨さを伝えていくことで、戦争がない幸せな世界にしていきたいです。

お　わ　り　に

「自分にとって平和とは何か」「なぜ、80 年経った今でも原爆のことを伝え続けているのか」という問いを一人一人が意識し、研修に臨みました。そして、子どもたちは広島での出来事を「知らない土地の昔の出来事」としてではなく、「今を生きる自分たちにつながる自分事」として受け止め、研修に参加する意義を見いだしていました。

被爆 80 年を迎えた今年、全国の被爆者の平均年齢は 86 歳を超え、10 万人を下回りました。体験を直接伺うことが難しくなりつつある中、私たちは被爆体験者の方からお話を聞くことができました。また、平和記念公園ガイド、平和記念資料館の案内、「平和宣言」や「平和への誓い」――どの場面でも「伝えていく」ことの大切さが語られていました。子どもたちは、ガイドや語り部の方々から聞いた悲しい出来事、平和記念公園や平和記念資料館に残る恐ろしい被爆の跡、それぞれから受け止めた平和へのメッセージを一つも逃すまいと、書き留め、記録しました。その上で、学んだ事実に思いを込めて「伝える」ために、自分の言葉と真剣に向き合いました。

「多様性を認め、相手のことを理解しようとすること。一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。周りの人たちのためにほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないでしょうか。」式典で、こども代表が語った一節です。研修中の子どもたちは、まさにその言葉のとおり、互いを思いやり、支え合いながら学びを深めました。そして今、広島で学んだことを伝え、行動しようとしています。

私たちも平和のために行動できる大人でありたいと強く思いました。子どもたちと共に学ぶ貴重な機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。

令和７年８月　副団長　伊藤　靖子